

令和4年度第2回「川崎区地域デザイン会議」開催結果

1 日時

令和5年3月16日（木）午前10時～正午

2 場所

カルッツかわさき大会議室

3 議題

「食料支援を通じたつながりづくり」

令和4年3月に開催した同テーマの会議の続きとして、前回の意見を踏まえながら、食料支援を通じて、子どもの居場所づくりや様々な人が集まれる場所となるための工夫等について意見交換を行った。

4 出席者

- ・地域で実践する区民・事業者等 6団体10名
中央第2地区社会福祉協議会福祉部、大師第1地区社会福祉協議会青少年福祉部、大家族ふるさと食堂、こども食堂さらら、社会福祉法人青丘社、たじま家庭支援センター
- ・団体等支援機関 1名
川崎区社会福祉協議会地域課
- ・こども未来局職員 1名
- ・区役所職員（事務局含む） 8名

5 内容

- (1) 区長挨拶（開会）
- (2) 出席者自己紹介
- (3) 地域デザイン会議の概要について説明
- (4) 前回の振り返り及び今回のテーマについて説明
- (5) 各課の取組について説明（別紙1）
- (6) 意見交換（別紙2）
 - ①「子どもの居場所となるために、どのような工夫ができるか」
 - ②「子どもだけでなく、様々な人が利用できるようにするためにはどのような工夫ができるか」
- (7) 副区長挨拶（閉会）

○各課の取組について

川崎区役所 地域支援課	<p>支援の必要な子どもについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動をしている中で、虐待が疑われるなど、気になる子どもに出会うこともあるかと思うが、そういった場合に、要保護児童対策地域協議会という、子どもを守るための地域の支援ネットワークがある。 ・この協議会には守秘義務が課せられており、それを守りながら、要保護児童・要支援児童・特定妊婦の支援を行っている。 ・川崎区では地域支援課、大師地区健康福祉ステーション、田島地区健康福祉ステーションの地区支援担当が支援を行っている。 ・虐待が疑われる子どもを把握した場合には、区地域支援課または児童相談所に知らせて欲しい。 ・知らせてもらった子どもが全て協議会の支援の対象となる訳ではないが、その場合でも区役所は一緒に対応を考えていく。 ・区役所が支援している子どもたちの中で、居場所があれば良いなと思う子どもがいる場合には、相談させてもらうこともあるかと思うので、その際は、協力をお願いしたい。
川崎区役所 地域ケア推進課	<p>地域の中でのつながりについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見守るためには、つながることが必要。 ・地域ケア推進課が行っている事業として、「こどもサポート旭町」と「子どもサポート小田」という、子どもの居場所の事業がある。 ・学校になじめない、家庭に居場所が見いだせないなどの事情を抱えた子どもを受け入れ、学習支援なども行うが、基本的には子どもの過ごしたいように過ごしてもらっている。 ・登録が必要だが、時間内なら来たい時に来て、帰りたい時に帰っても良いこととなっている。 ・3月13日に区役所で開催した「地ケア交流会」でファシリテーターを務めていただいた、牧岡英夫氏（「川崎区地域福祉計画推進会議」座長）が「依存的自立」ということを話していた。どんな人でも人間は一人では生きていけない。必ずどこかにつながりを持っている。つながりを1つの線とすると、その線が多いほど、その人は幸せな人生を送れる、というもの。 ・学校に行けば、先生や同級生などとのつながりがあるが、学校になじめない子に関しては、その線が少ない。そのような子が「子どもサポート」に来てもらえれば、スタッフや同じ境遇の子ども同士で友達になれば、

	つながりをつくることができる。
こども未来局 児童家庭支 援・虐待対策室	<p>こども未来局の取組の紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年度から「要支援家庭見守り体制強化事業」を市社会福祉協議会に委託し、モデル事業として行っている。 ・困っている状態の子どもを地域と協力して見守っていく体制・ネットワークを作っていくための事業。 ・今年度の取り組みとしては、まず、福祉事務所を中心とする公的機関による食料配布。支援世帯数は165世帯。 ・関係機関が集まるネットワーク会議を年5回開催。その中で、各機関の現状や取組状況などの共有、事業全般について話し合いを行った。 ・実験的な取り組みとして、「おにぎりキャラバン」がある。食料を配布する中で、お米を炊くことができない家庭があることが分かったことから、子どもを対象に、お米を炊くところからおにぎりを握るところまでを区の社会福祉職と栄養士が教えながら行うというもの。参加人数が少なかったことや地域の方との連携が課題。 ・年末休み期間に「みんなのごはん」という取組を行った。大師の地区社会福祉協議会が中心となって、84世帯に食料を配布した。 ・その他、関係機関へのヒアリングや民生委員児童委員協議会等での講演・研修会の開催、広報誌への掲載などを行った。 ・このような活動を通じて、地域の主体的な活動に行政が協力・支援できるような取り組みを進めていきたい。 ・1年間事業をやってみて、支援が必要な子どもや親が孤立しないように、気軽に集まれる居場所が必要だと感じている。 ・支援が必要な家庭の状況を見極めて、どのような支援が必要かを判断するのは行政の専門職の仕事だが、困っている子どもの声を拾うということに関しては、地域の方々の方が長けていると思う。 ・気楽に子供が集まれる場所が増えることで、その中で気付きが生まれ、行政につなげていく仕組みが作れればと考えている。

○質疑応答

大家族ふるさと食堂	<ul style="list-style-type: none"> ・専門職よりも地域の人たちの方が、何気ないところで子どもたちの声を拾うことができる。こども食堂をやっている人たちは、おそらく同じことを思っていると思う。 ・こども食堂に来る家庭の状況も区によって違う。支援が必要な子どもの割合は川崎区は多いのではないかと思う。 ・支援が必要な子どもに接していくことはやっていきたいが、そういつ
-----------	--

	<p>た子どもをどうやって見つけるかは、皆、試行錯誤している。こども食堂が必要な状況だけど、こども食堂とつながっていない子どもとどうつながっていけば良いか。</p>
中央第2地区 社会福祉協議会	<ul style="list-style-type: none"> ・区はそういった子どもを把握していると思う。我々も以前、そういった子どもがいるなら弁当を配って欲しいと頼んで、配ってもらったことがある。そういう形でも良いと思う。
こども食堂さらら	<ul style="list-style-type: none"> ・私たちが見つけて、行政に伝えるということは当然やるが、それとは逆で、行政が把握している子どもたちを私たちにつなげる仕組みがあればと思う。今は地域からの一方通行で、区役所からは情報が来ない。 ・去年は、田島支所をお願いしてフードパントリーのチラシをひとり親家庭や生活困窮者限定で配ってもらうことができた。そういったことがもっとやり易くなると良い。 ・区役所と地域の間にルートをつくってもらえれば、情報を出しやすい。その中で私たちのこども食堂に来てくれる子どもがいれば、気にかけて見守ることや声掛けができる。 ・田島支所は近いので良かったが、区役所・支所再編後は遠くなってしまっているので、行かなくなる。
たじま家庭支援センター	<ul style="list-style-type: none"> ・こども食堂開始に当たり、その当時は「こども食堂」＝「貧困家庭」とイメージされてしまう傾向にあったため、子ども・高齢者・障がい者を含めた共生食堂という考え方で運営してきている。 ・支援が必要な家庭にちゃんと届いているのか、という思いはどこの食堂でもあると思う。 ・少しずつでもつなぐ先や居場所が増えていけばと思う。その為には地域の理解者が増えていく必要があるので、地域づくりをいかにしていくか。いろいろなところに情報発信をしながら、キャッチボールをしていく必要があると思う。
川崎区役所 地域支援課	<ul style="list-style-type: none"> ・皆さんの活動は支援が必要な子どもを見つけることが主目的ではなく、子どもが居心地よく、楽しく、評価されず居られる場所であり続けることが大切だと思う。 ・活動の中で、「ご飯を食べていない」と言っている子や痩せてきた子など、気になる子や心配な子を見つけたら、児童相談所や区役所へ知らせたい。 ・相互通行になりたいという思いは我々にもあるので、相談させてもらいながら、進めていきたい。

中央第2地区 社会福祉協議会	<ul style="list-style-type: none"> ・わくわくプラザの職員に何人分必要か人数を聞いて、わくわくプラザを通して食料を渡すという方法をやっている。
こども未来局 児童家庭支援・虐待対策室	<ul style="list-style-type: none"> ・乳幼児の支援はしっかりとした枠組みがあるが、小学校以降は教育施策としてはしっかりあるが、支援策は弱い。子どもに関する情報量も福祉部門に比べて学校の方が圧倒的に持っている。 ・こども未来局として学齢児支援をしっかりやっていく必要があり、それをやっていくための、モデル事業だと認識している。 ・一方通行の問題は、個人情報保護の問題と密接に関係してくる。 ・保育園や医療機関などの公的機関でも、行政への情報提供を躊躇してしまう。通告者は守られるとはいえ、通告したことが該当家庭に知られてしまうと、築いてきた関係性に影響が出てしまう。 ・区役所や児童相談所などの行政側も、情報を出すことについては、個別の事情に応じて慎重に判断しないと、ハレーションを生んでしまう。 ・学齢児の支援が弱い中で、地域の方々に協力をいただきながら、子どもへの支援をいずれはやっていきたいと考えているので、個人情報の問題をどうするかも含めて、モデル事業の中で考えていく必要がある。 ・行政が持っている情報を施策の推進だけでなく、虐待予防の視点から、それぞれの情報を連携させ、支援が必要な家庭を把握し、積極的に地域に出ていこう、という考えをこども家庭庁が示している。 ・今、国で実証事業を行っており、個人情報保護法も改正・施行されるので、今後数年で個人情報の取り扱いも変化していくのではないかと考えている。
大家族ふるさと食堂	<ul style="list-style-type: none"> ・個人情報の問題は認識している。地域に住む支援が必要な子どもの一覧が欲しいというわけではない。 ・保健師や民生委員などに、そういった家庭や子どもにこども食堂の情報を提供してもらいたい。個々ではなく組織的にやってもらえると良い。
こども未来局 児童家庭支援・虐待対策室	<ul style="list-style-type: none"> ・モデル事業の中で、法的なルールを整理しながら、行政としてどこまでできるかなどを検証していきたい。 ・おっしゃるようなことは十分に可能だと思う。
川崎区役所 地域支援課	<ul style="list-style-type: none"> ・我々が関わっている子どもたちの中に、つなげたい子がいる場合は、子どもや親の了解を得たうえで、相談させてもらうこともあると思う。その際はご協力いただきたい。 ・地区担当の保健師だけでなく、組織として地域とつながり、そのパイプを太くしていきたい。

<p>大家族ふるさと食堂</p>	<p>(前回の発言「前回の振り返り」部分の補足)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「つながりに関する主な意見」の2つ目について、「お弁当にしたことで、食に困っている子どもたちが来られるようになった」とあるが、これはお弁当にした訳ではなく、コロナでせざるを得なかったから。 ・また、こども食堂に来ること、そこに居続けることにはハードルがあったが、お弁当にすることで、以前よりも支援を必要とする家庭の利用が増えたように思う。 ・やってみてわかったことがもう一つある。お弁当の配布に切り替えたことで、虐待につながるお母さんのストレスに良い影響を与えていると感じている。 ・多くのシングルマザーが忙しい中でお弁当を作っている。月2回でも無料でお弁当やお菓子がもらえることで、一緒に食事をとることができ、会話ができた、というお礼の言葉をもらったことがある。 ・地域とのつながりが希薄な中で、そういった家庭がコロナに感染すると本当に食に困ることになる。注文を受け付けた家庭でコロナに感染した家庭には、お弁当を届けたことが7件ほどあった。 ・弁当配布にしたことで、それぞれの家庭が子どもにとって少しでも過ごしやすい場所になることに貢献できていると感じている。
------------------	--

①「子どもの居場所となるために、どのような工夫ができるか」

<p>大師第1地区 社会福祉協議 会</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・民生委員として学校に出入りする中で、ご飯を食べてこない子どもがいることを聞いたので、こども食堂をやろうと思った。 ・ただ、こども食堂という名前ではこれまでに話が出ていたようなイメージがあるので、内容はこども食堂だが、「にこにこだるまさん」という名前を付けた。 ・こども食堂を始めるにあたって、地域の小中学校にチラシを撒いたが、応募はなかった。 ・口コミで何とか小学生を対象にした回は人数が集まった。 ・中学校の校長先生からは、「小さいころから地域と関わっていないと中学生になってからでは、参加しない」と言われた。 ・小学校と中学校にアンケートを取ったがこども食堂を知っている子どもはいなかった。 ・公園でチラシを撒いたこともあるが、社協や民協を知らない人が多く、信用してもらえなかった。 ・こども文化センターでこども食堂をやっているが、こども文化センターだと、子どもや親にも安心してもらえる。 ・多くの親子が来てくれるが、我々は作るのに精いっぱいコミュニケーションをとる時間がない。ボランティアが手伝ってくれて、余裕が出てくるともつつながれると感じている。 ・支援が必要な家庭を把握している保健師に、その家庭の人数や年代をリストでもらって、食料を用意して、保健師に配ってもらっている。 ・また、チラシに引換券を付けて配ってもらっているが、20件配って、2、3件貰いに来る程度。 ・地域の民生委員にも気になる家庭に、民生員としてではなくご近所さんとしてチラシを配ってもらっている。 ・長い目を見て、子どもたちの中で口コミで広がって、それが支援が必要な子どもにつながれば良いと思っている。
<p>中央第2地区 社会福祉協議 会</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・こども食堂を始めるにあたって、孤食があるので、みんなで食事を作って、食べて、楽しむ場所をつくろうと考え、「わいわいキッチン」という名前を付けた。コロナが収まれば再開したいと考えている。 ・子どもたちにとって、我々が信頼されていることが重要。 ・食料を配る形に変えてからは、困っている人に配りたいという思いが強くなった。民生委員として一人暮らしの高齢者のリストはもらうが、

	<p>困っている人のリストはもらったことはない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リストをもえらえなくても、行政では困っている人を把握しているので、我々のフードパントリーのチラシを渡して、行政から困っている人に配って、注文を我々に伝えてもらうというシステムなら、プライバシーも守れる。取りに来るのが恥ずかしければ、また、行政を通じて渡すこともできる。 ・その役割を行政に担ってもらえれば、直接手渡しが出来ないとしても、役に立っていると実感でき、やる気につながる。
<p>大家族ふるさと食堂</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ダンス教室をやっているが、コロナで学校が休校になり、子どもの居場所がなくなっている中で、それまで月謝をもらってやっていた教室を、好きな時に好きなだけ居て良い場所として開放したところ、いろいろなタイプの子どもが集まるようになった。 ・コロナをきっかけに、自分自身が地域に入っていこうという気持ちになれた。 ・こども文化センターに通っている子は、希望があれば、こども文化センターが終わった後に、迎えに行っている。帰る時も親が迎えに来れない場合は、こども文化センター前や自宅前まで送っていくこともある。 ・今はメンバーも増え、鬼滅の刃をモチーフにした「鬼滅キッズ」を始めたら、鬼滅の刃を好きな子も集まって来るようになった。 ・みんな勉強が嫌いだが、漢字検定を受けさせたら、全員合格した。その中には学校に行っていない子も含まれている。 ・学校に行くより、教室に来る方が楽しいと言って、教室にくる子もいる。初めの頃は学校に行くように言っていたが、いじめなどの事情もあっていけない子もいるので、来たいなら来ても良いと、考えが変わってきた。 ・今壁にぶつかっているのは、親の問題。子どもが教室に来ると孤独になる親がいる。週末に教室に来ようとする子どもを親が行かせないようにする家庭もある。 ・親からの信頼を得ないと、預けてもらえないし、お弁当ももらってくれない。 ・人付き合いが苦手なお母さんもいる。子どものためにも親の心をもっと開放してあげる必要がある。 ・今週「鬼滅キッズ」としてイベントに出るが、ボタン付けは全て私がやっている。精神的なものなのか、忙しいのか、ボタンを付けられない親がいる。

	<ul style="list-style-type: none"> ・親や子どもの考え方も変わっている中で、色々なことを試して、実証実験をしているのが現状。
--	--

②「子どもだけでなく、様々な人が利用できるようにするためにはどのような工夫ができるか」

社会福祉法人 青丘社	<ul style="list-style-type: none"> ・生活困窮世帯などへの学習支援では、子どもは100円、大人は200円でお弁当を配布している。食料支援へのニーズのある子供がたくさん来ている。 ・どうやったら支援が必要な子どもとつながれるのか、という話が出ていたが、うちの場合は、そういった子どもたちが学習支援に来てくれるので、学習支援に定着してもらうためのツールとして、食料支援を行っている。 ・高校での配布についても、もともと居場所カフェなので、大学生サポーターとの会話などを通して、大人と子どもの信頼関係をつくることを大事にしていたが、コロナ渦となり会話が難しくなったので、せめて食料だけでも持って帰ってもらおうと、始めた。 ・親子関係がうまくいっていない家庭でも、食料を配布して持って帰った日だけは、穏やかになる、という話も聞いており、効果はあると感じている。 ・学校や行政とのつながりの中で、こども文化センターの夜間の時間には、食費を含めて1日に100円しかもらえない子、兄弟が多く家に居れない子など、厳しい家庭状況の中高生が5、6人来てくれている。 ・そういった子に対して、食料の配布だけでも良かったが、こども文化センターには調理室があるので、料理を教えながらみんなで作るという形にしたところ、その中でコミュニケーションが生まれ、信頼関係が深まり、居場所となっていくのを実感した。 ・学習支援でお弁当を配布している子どもの中には、お弁当をもらってくることにに対して、親が怒るから家に持って帰るのは嫌だという子がいる。 ・その場で作ったり、食べたりできることが、親からの理解が得られたり、さまざまな子どもが利用しやすくなるポイントではないかと実践を通じて感じた。
大師第1地区 社会福祉協議会	<ul style="list-style-type: none"> ・次に開催する回に、19歳の申し込みがあった。ゆくゆくは我々の活動を手伝ってもらえたら良いなという思いから、見学という形で受け入れることにした。その子も興味を持ってくれていると聞いてうれしく思

	<p>っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今は活動を知ってもらうことを重視して、こども食堂だけどもあまり対象を限定せず、受け入れている。 ・0歳児のお母さんも夕飯をつくらない日があれば、いつもよりやさしい気持ちで子どもに接してもらえたら良いと思い、受け入れている。
こども食堂さら	<ul style="list-style-type: none"> ・ママたちは趣味を活かしていろいろな活動をしており、広いネットワークがある。こども食堂で使っているカフェにママたちが活動できる工夫をしており、そこに来るママたちのつながりやカフェの公式ラインに登録しているママたちのネットワークを通して、こども食堂などの情報を広めてもらえている。 ・フードパントリーを始めた時に、ママたちのつながりから、自分の家の近くに子どもだけで暮らしている家庭がある、という情報があり、それがきっかけでつながったことがある。 ・子どもの支援だけでなく、保護者支援でもあるという思いでやっている。保護者が安心できることが、子どもの安心にもつながる。 ・活動しているカフェは狭いので、初めからお弁当配布をやっているが、これでは居場所にはならない。 ・こども食堂の運営は、寄付がなければやっていけない。その中から会場費を出すのは大変。作って食べるまでをやろうとすると半日は掛かる。顔の見える関係をつくるには場所が必要。 ・生活保護を受けていると貰ったものは金額に換算して申告する必要がある大変なので、という理由でフードパントリーの受け取りを断られたことがある。 ・そのシステムを詳しく知らないが、それだと支援にならない。そういう仕組みになっているのなら、生活保護受給家庭はフードパントリーを使えないので、どうにかならないかなと思っている。 ・その問題をクリアしていくことで、更にいろいろな人が利用できると思う。
副区長	<ul style="list-style-type: none"> ・制度がどうなっているか確認する。
川崎区社会福祉協議会地域課	<ul style="list-style-type: none"> ・食料支援を始めて3年目となる。行政との連携はうまくとれるようになってきたと思うが、行政だけでなく、行政と地域をつなぐパイプになっていきたいと思っている。 ・民生委員児童委員協議会の担当もしているので、地域活動の情報を民生委員にも知ってもらい、地域と民生委員の連携が取れるように、区社協としてやれることを考えていきたい。